九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

上代日本文献に見える「魚韻」の漢字 : 朝鮮漢字音との関連について

藤井, 茂利

https://doi.org/10.15017/12141

出版情報：語文研究. 37, pp.7-15, 1974-08-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

上代日本文献に見える「魚韻」の漢字

―朝鮮漢字音との関連について―

藤井茂利

序

上代日本文献に用いられた音仮名の中で、その由来が古朝鮮の漢字音と特にかゝわり合いが考えられる二、三の漢字について、これまで数編の小論を発表してきた。その目的としているところは、上代、我が国に渡来して来た朝鮮系帰化人の持つ漢字音の体系を明らかにし、上代日本の音仮名との関連を考察することにある。実は此のことは先に発表した小論の序でも触れておいたのであるが、[1]今一度その時の要旨を示しておくことにしたい。

漢字は朝鮮半島を経て我が国に伝来し、我が国の国語表記も朝鮮からの帰化人の指導によって始ったと考えられている。であれば朝鮮系帰化人の携えて来た漢字音の解明はそれ自身興味のある問題であると同時に上代日本語解明の手がかりにもなり得ると思われる。しかし現在問題となるのは、帰化人達の筆録した古記録が仮令、今日に伝っていても、その古記録に用いた漢字から、中国音の推定は比較的容易でも、帰化人達の使用した朝鮮漢字音の推定はかなり困難を伴う点にある。もともと音韻体系の異る漢字を朝鮮人が使用する場合、如何に中国音に忠実にと努めても、漢字の朝鮮音化の問題は避け得られず、結局のところ帰化人の使用した漢字音の推定は古朝鮮で中国漢字音をどのように受け入れたかの問題につながっていくであろう。ところで朝鮮で用いられた漢字音を推定するには出来得る限り朝鮮の古文献によるべきは当然であるが、諺文制定以前の文献は全て漢字による表記であるため、或る漢字音の推定に他の漢字をもってすることになり堂々めぐりに終る可能性が多分にある。その弊を避けるため漢字と諺文併記の資料を古音推定の手がかりにする方法も考えられる。具体的に基礎資料として「千字文」を用いるのも一つの方法であろう。天地玄黄　宇宙洪荒に始まり、焉哉乎也に終る千字から成るこの韻文は朝鮮に於いても漢字学習の手引きとして広く用いられ、比較的強く朝鮮漢字音の伝承が見られるようである。此の「千字文」に用いられた漢字音を基礎に朝鮮の古文献に見える漢字音の推定を試みたい。

右が先に発表した小論の序の要約でもあり、また此の小論の序でもあるが、更にこの序に、併せ朝鮮漢字音と上代日本の音仮名との関連をも考えたいと付言しておくことにする。

ところで、我が国上代の音仮名の中に朝鮮音に基づくものがあることを福田良輔先生は指摘され、大著「奈良時代東国方言の研究」の中で、このことを述べておられる。[2] しかし、実は先生は早く昭和三十二年度後期の「国語学特研」の授業でこの問題を取り上げられ、きびしい演習をされた。[3] 与えられた課題は日本書紀記載の朝鮮語彙の表記に用いられた音仮名を調査すること、書紀引用の朝鮮史料に見える日本人名表記に用いられた音仮名を調査すること及びその使用法を比較検討することであった。私が今日まで上代漢字音に関する研究を続け得たのも、この時以来の先生の御指導の賜物であり、この小論も測り知れない先生の御学恩によっていることを先ずもって感謝申し上げなければならない。

一

さきに「千字文」の漢字を韻鏡の漢字音分類法によって分類した。[4] これは日本漢字音と朝鮮漢字音、中国音との比較を便ならしめるための、つまり中国音をいかに朝鮮化して受入れているかを調査するための基礎資料でもあった。本稿でもこの資料を利用し、「遇摂」魚韻に属している漢字の二、三を取り上げて中国音と朝鮮音との関係、朝鮮音と日本の音仮名との関連など考えていくことにしたい。魚韻の漢字は韻鏡の「内転十一開」に見えていて、この「遇摂」の漢字は上代日本語のオ列音の仮名の中心をなし、ウ列音との関係も生じていて古来問題の多い摂であるが。この小論では問題を進めていく関係上、この摂の中の魚韻の漢字で、「千字文」に見える漢字の朝鮮音との関係についてのみを記しておくことにする。なお参考のため日本漢字音（漢音・呉音）をも併記しておくことにした。

		朝鮮音	漢音	呉音
魚韻	二等	初 초 (ʃo)	ショ	ソ
	三等	居 거 (kɔ)	キョ	コ
		渠 거 (kɔ)	キョ	ゴ
		魚 어 (ɔ)	ギョ	ゴ
		諸 제 (tʃie)	ショ	ソ
		書 서 (sjɔ)	ショ	ソ
		於 어 (ɔ)	オ	オ
		虚 허 (hɔ)	キョ	コ
		餘 여 (jɔ)	ヨ	ヨ
		誉 예 (je)	ヨ	ヨ
		驢 녀 (njɔ)	リョ	ロ
		如 여 (jɔ)	ジョ	ニョ
語韻	二等	楚 초 (tʃo)	ショ	ソ
		所 소 (sjo)	ショ	ソ
	三等	女 녀 (njɔ)	ジョ	ニョ
		挙 거 (kɔ)	キョ	コ
		去 거 (kɔ)	キョ	コ
		巨 거 (kɔ)	キョ	ゴ
		鉅 거 (kɔ)	キョ	コ

語 어 (ɔ) ギョ ゴ
暑 서 (sjɔ) ショ ソ
黍 서 (sjɔ) ショ ソ
呂 려 (njɔ) リョ ロ
與 여 (jɔ) ヨ ヨ
助 됴 (tʃo) ショ ゾ
疏 소 (so) ショ ソ
據 거 (kɔ) キョ コ
御 어 (ɔ) ギョ ゴ
庶 서 (sjɔ) ショ ソ
處 처 (tʃ'jɔ) ショ ソ
飫 에 (e) ヨ オ
慮 려 (njɔ) リョ ロ
四等 豫 예 (je) ヨ ヨ

ここで特に問題のある諸・誉・飫・豫の漢字について触れておきたい。「千字文」にはこれらの漢字の主母音にeの音が現れ、魚韻・語韻・御韻（以下都合上まとめて魚韻という）の漢字音としては全く異例の音になっている。しかし同じ伝承音としての性格のある訓蒙字会[8]では飫は어（下十九）、予は여（下二四）となって「ɔ」音が現れている。諸・誉は「日鮮新玉篇」に저・여と「ɔ」音が見えている。であればこれらの漢字にはɔ、e二音が伝承されていたとも考えられる。

ところで、これらの漢字にe音が現れる原因の的確な説明は困難であるが、魚韻の中国音は漢代のiɐから魏・三国時代のiə[9]に、更にiθと変ったと説明がされている。この説が果して妥当であるかは問題であるが、音変遷の過程で母音aが介母ïの影響を受けeに発せられる可能性は考えられる。大野晋博士の説によれば「iaという母音連続の縮約形」は「e」に、「aiという母音の縮約形」は「ɛ」になるという[10]。そして恐らくこの音変化は中国音についても当てはまるであろうと考えられる。であればこの朝鮮音のeは中国古音iəがeと響いたものを写したと考えることが出来るであろう。かく考えれば伝承音に二様の音が現れるのも理解される。

ところで魚韻の音について大島正健氏は「漢音能く『韻鏡』と一致す。朝鮮音も亦然り[11]」として朝鮮音が漢音に類似しているとされたが先の比較を一覧すれば、むしろ呉音に類似していると言うことが出来るであろう。

二

魚韻三等の中国中古音推定には種々問題があって定説を見るに至っていないが、中国音韻学者藤堂明保氏は六朝の初期、魚韻はr-jə、唐末にr-jɔと変化したと推定された[12]。大野氏は三国時代から六朝唐代にかけてiə→iθと変化したと考えられた[13]。両氏の音推定方法には根本的に相違する点が見られるが、ただ六朝の頃の音推定で、介母を伴う中舌母音と考えられている点では、ほゞ一致した見解に達しておられる。ところで「千字文」の朝鮮音では、問題のある諸・誉・予・飫などの漢字は置くとして、介母を伴う中国の中舌的母音を特に牙喉音は介母ïを消滅して「ɔ[14]」の形として受け入れている。では諺文制定以前では如何であったか、朝鮮の古文献に見える魚韻の漢字の中国音の受

け入れ方を調査し、「千字文」との関連を求めてみることにする。

「居」の漢字について

法界居得丘物叱丘物叱　（恒順衆生歌）

（法界に満てる衆生の）[13]

右の「居得」を小倉進平博士は「満てる」の意として「가득」とよまれ「居」が「가(ka)」の音に当てられているとされた。

梁　柱東氏は「居得 는 ᄀᆞᄃᆞ 외 俗音 거득」[14]と述べられ「居」は「거(kɔ)」の表記とされておられる。

ところで梁氏も引用しておられる

歓呼之声이道上 ·에ᄀᆞᄃᆞᄒᆞ니[15]　（龍歌）

贏 ᄀᆞᄃᆞᄒᆞᆯ 영　（訓蒙字会　下二二）

の用例を参照すると「居得」は「ᄀᆞᄃᆞ」の表記で漢字「居」は中舌音「ᄀᆞ(kɐ)」に当てられていると考えるべきであろう。

毛冬居叱沙　（得烏谷慕郎歌）

（総てのものぞ）

小倉氏は「居叱は 것(物)」と考えておられる。博士のお説の通りで他に異説は見られない。この用例から見ると「居」は中舌音「거」に当てられていると考えられる。

居柒夫或云荒宗　（三国史記四四）[16]

「夫」と「宗」とが同一語に対する異表記であるのは、[17]「異斯夫或云苔宗」の場合と同様である。であれば「居柒」が「荒」に相当し、「荒」の意を表わす朝鮮語「거칠」を表記したものと思われる。この場合も「居」の漢字は中舌音「거」を表記していると言える。

居叱弥王一今勿（三国遺事二）[18]

「今」は「金」と相通音で「深摂」に属する漢字であり、「金」音が古朝鮮で「コム(kẅn)」であることは既に述べている。[19]であれば「居」は中舌音表記に当てられていると言える。

以上のように見たとおり「居」の漢字は「物・荒」の朝鮮語表記に用いられ「거(kɔ)」音となっている。また「満」の朝鮮語に当てられ「ᄀᆞ」、或いは人名の「ᄀᆞᆯ」に当てられている。何れの音も中舌音であるが、伝承性の強い「千字文」の漢字音「거」との関連を考慮すると、「居」は六朝頃の中国音を朝鮮化し中舌音「kɔ（実際にはkəの音）」として受け入れていたものと思われる。

「渠」の漢字について

清渠県本百済勿居県　（三国史記三四）

「清」の意を表わす朝鮮語は「맑다」であり、「勿」の意を表わす朝鮮語は「말」であるので同一語に対する異表記と思われる。であれば、「渠」「居」も同一語の異表記と考えられる。既に述べたとおり「居」が中舌音「kɔ」であるのと同様「渠」も同音相通と考え、「kɔ」の音であると考えられる。

「去」の漢字について

法界毛叱所只至去良　（礼敬諸仏歌）

（法界の果しまでも至るべし）

梁氏は「去良 은가라 글 命令助詞 거라 외 俗形」[20]とされ「去」を「거」の音と考えられた。吏読にも「去」の漢字の用例が見えている。[21]

去乃　…スルカ、…デアルカ　거나　事発為去乃或各犯

罪為遣　（大明律）

去乎　…デアルカラ　거온　馳援事乙移文為去乎両大将不分晝夜云々

去乙　ノニ、ノデ　거늘　祖父母果父母果現在為去乙（大明律）

去等　…ナラバ　거등　皆字無去等依首従為論齊（大明律）

去沙　…シテコソ　거사　有餘不足為所無去沙解由文字乙成給為齊（大明律）

右に見られるように「去」の漢字は「거」音として用いられていると考えられ、「千字文」の伝承音とも一致する。朝鮮では上古から介母の無い中舌音として用いられていたものと考えられる。

「如」の漢字について

郎也持以支如賜烏隠（讃耆婆郎歌）

（郎の持し止まりませる）

小倉氏は「儒胥心知」で「為如良」を ᄒᆞ여라、「岐如」を가ᄅᆞ혀、「初如」を초혀と訓ずることのあるを例証に「支如」二字で피여と訓ずべきとされた。[23]「千字文」の漢字音と考え併せ、「如」の古朝鮮音は「여」音であると考えてよいであろう。

「呂」の漢字について

道尸迷反群良哀呂舌（請仏住世歌）

（道に迷へる徒よ哀れむべきかな）

小倉氏は「哀」の意を表わす朝鮮語は「ᄉᆞ러」と言うとされ「呂は스러위の러に宛てた字である」[24]と断定され、古朝鮮で「呂」が「러」の音であることを明らかにされた。「千字文」では「呂」は「녀」と伝承されているが、「ㄴ（n）」は、語頭に「r」音が立たない朝鮮語の影響を受け伝承されている中に変化したもので、本来の朝鮮漢字音としては「ㄹ（r）」音であったと思われる。また「千字文」の漢字音では介母を伴った形になっているがこれは後世的で郷歌の例に見られたように本来「러（rə）」音として中国音を受け入れていたと思われる。

「虚」の漢字について

塵塵虚物叱邀呂白乎隠（称讃如来歌）

（塵塵虚物に邀へまつる）

梁氏は「虚物」について「아마『虚空界一切物』을 指称한 当時佛家의俗用語 일것이다」[25]と説明しておられる。아마（恐らく）と断っての説明であるが当を得たものと思われる。ところで「虚」の古朝鮮音の推定は現在のところ確定的な方法が見出し難いが、釈迦一代の言行録と言われる「月印釈譜」[26]に用いられている「虚」の漢字には全て「헝」の諺文が付せられている点から推して「허」音が古来伝承されていたものと考えてよいであろう。

「於」の漢字について

於内秋察早隠未（月明師為亡妹営齊歌）

（何れの秋の早き風に）

「於内」は「何れの」の意を表わす朝鮮語「어느」に当る。従って「於」は「어（ə）」の音を持つ漢字である。吏読に用いられた漢字「於」は

浄兜寺良中安置令是白於為（若木石塔記）[27]

に見え、「…、セシメラレヨウト、命ジョウトイタシマシテ」

の意を表わす朝鮮語「시기어ㅎ」の「어」音の表記に当てられている。古朝鮮では既に「千字文」に見られる「어」音が用いられていたものと思われる。

「所」の漢字について

魚韻二等音。「千字文」では「소(sjo)」となっているが、同等の漢字疏・初・楚が「소(so)」になっている点、訓蒙字会で「소」になっている点を考え「소(so)」音として扱うことにする。ところで有坂秀世博士・河野六郎博士によれば、魚韻歯音二等にo音が現れるのは後世的であるという。であれば「千字文」の「오(o)」音は後世の音が混入したものである。朝鮮の古文献には

赤鳥縣本百済所比浦縣(三国史記 三六)

扶餘郡本百済所夫里郡(〃)

所夫里郡一云泗沘 (〃 三七)

とある。「所比」は「赤」の朝鮮音「셔(sjok)」を表わしていると考えられ「所」が中舌音として用いられている。

次の「所夫里」は三国遺事に

國号徐羅伐又徐伐 今俗訓京子云 徐伐以此故也

とあり、訓蒙字会「京 서울 경」(中・七)とあって、主要な都邑を「ソホル(ソウル)」と言っていたことが知れる。金沢庄三郎博士が「百済は聖王十六年春、都を泗沘一名所夫里に移して国を南扶餘と号した」と述べられたが、今問題のこの「所夫里」も恐らく「主要な都邑」の意を示す語と考えられる。であれば「所」の漢字はやはり中舌音に当てられたと考えられる。

「助」の漢字について

梁氏は「龍飛御天歌」の「南為助、邑浦ㅈ、島개」(二・二二)をあげられ、「ㅐ」音と「o」音とが韻転すると考えられた。しかしこれは「助」の漢字に中舌音があると考えるべきであろうと思われる。であれば「舒弗」서불(sŏpŏr)の音訳と思われる日本書紀の「助富利」の表記に「助」の漢字が用いられているのは朝鮮系帰化人達が中舌音として「助」の音を音体系の中に収めていたからだと説明することが出来る。

以上魚韻の、朝鮮古文献に見える漢字音を「千字文」の漢字を基に置いて推定してみたのであるが、一般に中舌音「ɔ」であったと言える。そして魚韻で見る限り中国六朝頃の音を受け入れ、これを土台として朝鮮音が組み立てられていると言うことが出来そうである。

三

上代日本での魚韻に属する漢字、特に於・居を取り上げ、仮名化の過程を考察してみたい。

「於」の漢字は

阿米久爾於志波留支廣庭(上宮聖徳法王帝説)

和何於保支美 (同)

と「オ」の仮名として用いられている。また一方推古遺文に

阿米久爾意斯波留支比里爾波乃彌己等(天寿国曼陀羅繍帳銘)

との表記もあって「オ」の仮名として「意」が用いられ、同一語「オシハルキ」の「オ」に於・意の表記が見られる。ところで推古朝時代の「オ」の仮名としては「意」が一般に用いられ

たのは周知のとおりで、これは渡来した朝鮮系帰化人が我が国に持ち込んだ音仮名と考えられている。「意」の朝鮮音は「wi」と考えられ、発音に際して強い円唇性が感じられる。これが円唇性の「オ（乙類？）」を書き表わすに適した文字と思われたのであろう。

推古朝遺文の「於」の文字使用は

並著於床　（釈迦佛造像記）

歳次丙午年召於大王天皇與太子　（薬師佛造記）

神井出於下無不給　（伊予道後温湯碑）

應生於天壽國之中　（天寿国曼陀羅繍帳銘）

と見えているように、漢文の置字に用いられ仮名としての使用は「意」に遅れている。ところでこれらの漢文の文章は朝鮮系帰化人の指導によってなったと考えられているが、一般に朝鮮では漢文は漢字音で読み下され、場合によっては吐を振って読むこともあったが、ともかく所謂棒読みに読み下されたと言われている。[11] かかる読解方式を取る帰化人に漢文の指導を受ければ、置字の「於」も当然音読され、古朝鮮音が持ち込まれ定着し、やがて法王帝説に見られるように仮名としても用いられるようになったと考えられる。仮名として「於」が、仮名「意」に遅れて用いられたのは、この漢字が円唇性にやや欠け、ぞんざいな発音の場合には「ɐ」・「ɛ」音にも響くこともあって日本語の「オ（乙類？）」音に当てるにはやゝ異質と感じたからであろう。

次に「居」の漢字についてであるが、

等己彌居加斯支夜比彌乃彌己等（元興寺露盤銘）

等己彌居加斯支移比彌乃彌己等（天寿国曼陀羅繍帳銘）

と用いられている。この露盤銘・繍帳銘の文章は朝鮮系の帰化人によってなったものと考えられている。であれば「居」は帰化人によって持ち込まれた音仮名と考えてよいが、この仮名は「ケ（乙類）」音として用いられている。推古期に「居」が「コ（乙類）」音として用いられなかった理由の一つに「己」の漢字が同時に持ち込まれたことが考えられるであろう。

漢字「己」は

奈靈郡本百済奈己郡　（三国史記・三五）

己汶縣本今勿　（〃　・三七）

多仁縣本達己縣或云多己（〃・三四）

蘇山縣本率己山　（〃　）

伴跛國略奪臣國己汶之地（継体紀　七年）

など古朝鮮では使用頻度の多い漢字であった。そして「己汶縣本今勿」で見られるように「己」は「今（kwn）」音に通じている。であれば「意」の場合と同じく強い円唇性が現れ「居」よりも一層日本語の「コ（乙類）」に近く感じられたと思われる。

ところで姜斗興氏は「居は金石文や史の地名表記（八居縣・勿居・居知山縣）及び遺の郷歌にも繁出しており、古層の吏読である」[12]と述べられ「居」の朝鮮音と我が国推古期の「ケ（乙類）」音との一致を見出そうとされる。しかし姜氏が繁出するとされる郷歌の「居」の用例は既述の二例のみで、しかも「kë」音は見出せない。既に述べたとおり古朝鮮での「居」音は、或いは「ㅋ（kë）」に当てられることはあっても基本的には「ㅋㅣ」音であった。ところで「居」が「ケ（乙類）」音表記に当てられ

たのは、漢字「於」の場合にも触れたとおり、結局この漢字音が円唇性にやや欠ける中舌音であるためで、強い円唇性の現れる「己」に比べれば「コ（乙類）」的な感じを受けず「kɛ」音に近いとさえ思われたからであろう。「ケ（乙類）」音表記が定着したかに見えた「居」は、「己」の漢字の強い円唇性のためこれが更に「キ（乙類）」に近いと意識されるに伴い、今度はその中舌性が生かされ「コ（乙類）」音表記の漢字として用いられるようになったと考えられる。くり返して返べておくならば、「居」の漢字は、朝鮮では「ㄱ（kɔ）」音として中国から受け入れ、この音を持って帰化人達は渡来して来たと思われる。この漢字は、日本側の諸条件もあって或いは「kɛ」音に宛てられる場合があったと考えられる。と考えなければ、本来「居」に「ケ（乙類）」音の体系を持たない「新しい帰化人」[33]の指導・表記になった推古期遺文に、古い漢魏音が現れるのは全く不可解なことと言わなければならない。

朝鮮音と日本の音仮名の関連について於・居以外の多くの漢字についても触れるべきであるが、他日にゆずりたい。ともあれ、この魚韻の漢字は古朝鮮では一般に中舌音であった。そして「千字文」の漢字音にも通じるところ多く、更に「呉音」との類似も見られた。このことは音仮名研究に大きな示唆を与えているように思われる。

注1　拙稿　「深摂」に属する朝鮮漢字音
　　―日本漢字音とのかかわり合いに於いて―
　　薩摩路十八号（鹿児島大学法文学部国文学科）

2　福田良輔先生　奈良時代東国方言の研究　一九九頁　風間書房

3　この授業で使ったプリントがまだ手もとに残っていて、破珍などの語が見えている。破珍（ハトリ）が朝鮮語の바 돌になぜ当るか理解出来ず苦労したことが思い出される。先生の演習は常にきびしく緊張の連続、身のちゞむ思いのすること度々であったが、この授業は上代漢字音の研究を始めるきっかけを作って下さった思い出深いものになった。

4　拙稿　日本漢字音と朝鮮漢字音
　　―「千字文」の漢字を中心に―　鹿児島大学法文学部紀要　文学科論集第九号

5　東洋学叢書版　檀国大学校出版部

6　永昌書館版

7・11　大野晋　上代仮名遣の研究　一八〇頁　岩波書店

8　大野晋　万葉時代の音韻　三一七頁　万葉集大成（言語篇）

9　大島正健　漢音呉音の研究　八三頁　第一書房

10　藤堂明保　中国語音韻論　二二四頁　江南書院

12　「ㅇ」を「ɔ」の形で記号化する方法は、朝鮮語小辞典（宋枝学編大学書林版）によっている。「ɔ」の記号は奥舌母音と一般にされているが、こゝの「ɔ」は中舌母音の「ə」を写していると以下考えておきたい。

13　小倉進平　郷歌及吏読の研究　一三〇頁　京城帝国大学法文学部紀要
　　以下郷歌の日本語訳は全て小倉氏によるものである。

14　梁柱東　古歌研究　八三七頁　一潮閣

15　前間恭作　龍歌古語箋

16　三国史記　学習院東洋文化研究所版

17　拙稿　上代日本文献に見える漢字「叱」について
　　―朝鮮系音仮名をさぐりつつ―
　　福田良輔教授退官記念論文集

18　三国遺事　学習院東洋文化研究所版

19　注1の拙稿

20　注14と同じ　六八九頁

21 吏読集成（朝鮮総督府中枢院）・吏読の用例は注13　三〇五頁
22・23 注13と同じ　一七八頁　一二二頁
24 注14と同じ　七一一頁
25 月印釈譜（第九・第十・第十七・第十八）延禧大学校版
26 前間恭作　若木石塔記の解読
27 有坂秀世　漢字の朝鮮音について　国語音韻史の研究（旧版）
河野六郎　朝鮮漢字音の研究　朝鮮学報第三三輯
28 金沢庄三郎　日鮮同祖論　二一七頁
29 注14に同じ　六八二頁
30 拙稿　日本書紀の音仮名「富」について湘南文学第五・第六合併号
―古事記の用法と比較しつつ―　（東海大学日本文学会）
31 河野六郎　朝鮮語（世界言語概説）　研究社
32 姜斗興　吏読と万葉仮名に関する研究　立命館文学三二三号
33 関晃　帰化人　至文堂